トランスクリプト
——4人の震災被災者が語る現在(いま)——

矢　守　克　也*

The transcript of oral narratives by four disaster victims

Katsuya YAMORI

要　旨

本論文は、4人の震災被災者が、阪神・淡路大震災の体験を語り継ぐための語り部活動（「語り部グループ117（G117）」）において展開した語りの内容をトランスクリプトの形で採録したものである。そのねらいは、2つある。第1は、G117の活動の記録を保存することである。震災後8年を経て体験風化が叫ばれる今日、こうした試みそのものを記録にとどめておく意義もあろう。第2のねらいは、本論文で採録した4つの語りを分析した論考（矢守，2003）を補完することである。G117の詳細、語り手らの横顔、語りの収録状況、分析内容については、すべて、矢守（2003）を参照し本論と併読願いたい。なお、登場する個人の氏名はすべて、当事者の了解を得た上で、実名で記載している。

I　はじめに

本論文は、4人の震災被災者が、阪神・淡路大震災の体験を語り継ぐための語り部活動（「語り部グループ117（G117）」）において展開した語りの内容をトランスクリプトの形で採録したものである。そのねらいは、2つある。第1は、G117の活動の記録を保存することである。G117は、震災の体験を当事者の語りを通して保存、継承することを目的に結成された団体である。よって、震災体験を記録にとどめておくことはもちろん、震災後8年を経て体験風化が叫ばれる今日では、こうした語り部活動の試みそのものを記録にとどめておく意義もあろう（矢守，2001; Yamori, in press）。第2のねらいは、本論文で採録した4つの語りを心理学的に分析した論考（矢守,2003）を補完することである。矢守（2003）では、本稿に収録した4つのトランスクリプトを基に、4人の被災者（庄野さん、浅井さん、長谷川さん、市原さん）の語りが詳しく分析されている。また、G117の活動の経緯、4人の語り手のプロフィール、語りの収録状況などについても報告されている。つまり、本稿のトランスクリプトと矢守（2003）の論考とは併読を前提としている。両者を相互参照願えれば、幸いである。なお、本稿に登場する個人の氏名はすべて、当事者の了解を得た上で、実名で記載している。また、語りの節立て（セクション分割）は、語りの内容、および、発語の際の間（ま）を勘案して筆者が便宜的に設けたものである。

平成14年9月27日受理　*社会学部人間関係学科

Ⅱ　庄野さんの語り

(1) [0：00]

NGOセンターへ、細谷先生と一緒に、あの、4人ほど、来られて、一度お目にかかったことあるんですけれど。えーと、今日は、あの、私は、神戸の語り部グループ117の庄野と申します。今日は、ここ、郡山の中学校の皆様に、お会いできて、本当に、あの、ご一緒に、命の大切さを、地震の話を通して、皆様とともに考えていきたいと思います。では、まず、私が地震の時、どんな状況であったかをお話したいと思います。

(2) [0：50]

あの、昔から地震・雷・火事・親父と、子供の頃よく言ってましたが、お父さんの方は、お父さんは怖いもの、雷は大嫌い。そんな感覚でしたが、神戸の地震で、まず地震が、その、地震・雷・火事・親父の筆頭に、地震がくるという意味がよくわかりました。私が60歳、この歳、60歳になるまで、神戸に住んでまして、震度3くらいの地震は時々感じてました。でも、震度3くらいだったら棚の物が落ちてくることも、まあ、おそらくありません。ただ、ああ、よく、揺れてるなあくらいで、その感覚で、そうこうしてるうちに、地震は、あの、止まってしまう。そういう生活だったから、神戸はもう地震はないものという感覚でいたんですね。ところが、あに図らんやです。今回の、今回の、言うたら、7年前の、約7年前の地震っていうのは、あのー、想像に絶するもんだったんですね。

(3) [2：02]

あん、なんていうのかな、最初にちょっと揺れたんですね。で、あっ、地震だっと思って、隣の部屋にいる息子を起こそうと思って、あの、お布団の上、こう、座りかけたんですね。そしたら止まったんです。あッ、止まったと思った、もう瞬間に、何んかドーンという感じで、あ、これはもう私は死ぬと思って。そう思った途端に、もう気失って、気を失ってしまって、あの、家の下敷きになってしまってたんですね。ほんで、それは自分は気を失ってるから、何が起きたかわかりません。で、はっと思って、あんと、気がついたら、そしたら、あの…どう言うんですか。身体が全然動かない。で、真っ暗。

(4) [2：59]

そしたら、隣の部屋から隣の部屋じゃなくて、お隣のおばあちゃんがすごい元気な声で、あの、「助けて、助けて」って叫んでるんですね。で、いや、おばあちゃん、なんで、「助けって」、ゆう、「助けて」って怒鳴ってるのかなあと思って。地震でそうなってる記憶は全然戻らなくて、え、もう、あの、気がついたら、あの、明かり一筋ささなくて真っ暗い、これ、ものすごい暗闇なんですね。で、いったい何があったのかなあ。私が交通事故にでも、あ、おうて、で、こんな状態なんかなあと思って。そう思うだけでボーと頭してるんですね。で、あ、おばあちゃんが「助けて、助けて」って呼んでるから、私も、ちょっと声を出してみようかなあと思って…、「助

けてぇっ」て、声を出しかけたんですけど、もう、全身が圧迫されてるから、その苦しさで声が出ないんです。で、あ、あの脂汗がワッて出てくるから、あ、これは声を出したら、それこそ気分悪くてダメなんだって思って、その時に、あの、まあ半ば諦めて、で、そしたら、またおばあちゃんがね、私の息子の名前をね、「聡ちゃん、助けてっ、聡ちゃん、助けて」って言うんですよ。で、その時、どうして息子の名前を呼んでるのかなあ、なぜだろうなあって、そればっかり、それこそ、地震でそうなってたら息子はどうなってるのかなあ、っていう思いがあるでしょうけど、地震ていうことが全然頭にないから、その感覚で、一種それで、あの、下敷きになったまま、あの、我慢してるっていうか、我慢するも何も動けないんですよね。あの、地震と同時に、お仏壇が、ドーンと飛んできてお仏壇が私の身体に、う、あの、被さってしまったんです。ま、それで、あの、壁土やそんなんで窒息死は免れたんですけど。その全然動けないっていうのが、あの、う、自分にとってはね、こんな、こんなに辛いものかなあって思っているうちに、右足がね冷たくなってきて、硬くなってくるのがわかるんですね。で、ああ、これは、おかしいなと思ったけど、どうにも動けない。1センチも動けない。その中で…。

(5)［5：35］

あの…。ほっと、耳をすましてみると、娘が、「お母さん、お母さん」って、きく、あの小さい声で聞こえるんです。本人は精一杯怒鳴ってるんでしょうけど。あの、壁土や瓦礫に埋まってるから、その、外の声もあんまり聞こえない。こっちからも声を出しても、聞こえないという状態の中でね、あの、埋まってしまってたので。

(6)［6：02］

そうしてるうちに、何か、あの、周囲に助けてくれてる、たくさんの人が助けに来てくれたらしいんですけど、何にも声が聞こえなくなって、あ、これはもう、私は死んだと思って、もう皆諦めて、あの、どっか行ってしまったのかなあと思って、そうこうしているうちに、だんだん、あの、汚い話なんですけどオシッコもできない。ウンチがしたくてもできない。それを一生懸命我慢している辛さっていうのはね、あの…言葉に表せないですね。で、その時に、あの、皆さんね、あの、経験あると思うんですけどね、もの食べたりした時に、こうひょっと、舌の先を噛んだら、すごい痛いでしょ？　で、私はね、これは助けに来てもらえなかったら、もう時間の問題だから、あの、どうしたら楽に死ねるかなあと思って考えてたんです。ほんで、こう立って、たっ、立ってられる状態なら、舌を噛むこともできるでしょうけど、横向きになってこうなってる状態じゃ舌を噛むこともできない。これは、死ぬにも死ねない。どうしようと思って、ほんとにそればっかり一時期真剣に考えてたんですね。

(7)［7：24］

そしたら、あの、なんか、かすかにね、私が飼ってた犬の鳴き声がするんです。で、犬の声がするから、あ、犬が生きてるんだなあっと思って、そしたら、ちょうどその時に、あの、娘と娘婿が皆で、犬が鼻先だけ、あの、瓦礫の中から出てたんで、瓦礫を取り除いたら前足が両足とも

骨が折れて、あの、グラグラしてたらしいんですね。で、その犬はね、普段人を絶対噛んだことがないんです。それに、その、娘を噛むようなふりをして、ウーウーって言うて噛むふりをして、そして、ヒイヒイヒイ、言いながら首を振るんですって。ほんでね、娘がね、あの、娘も、えーと、何年間か、その犬と一緒に暮らしましたからね、だから、あ、お母さんが生きてるの、この子わかってんねんわって。「ごめんね」って、「お母さん助けたら、助けてあげるからね。我慢しときね」って、言うて、私を助けに、あの、かかってくれたんですね。そしたら、その犬のいたところ、瓦礫を全部のけてる。だいぶのけてるところへもってきて、そこが、あの、空間ができたもんですから、両隣から、瓦礫を、ぽんぽこぽんぽこ、あの、投げ出すんですね。そしたら、また、犬が埋まってしまって、結局、あの、犬は、亡くなってしまったんですけど。それでまあ。あの子が知らせてくれたおかげで、あの、私は、今の私があるんですけど。

(8) [9：00]

あの… [メモを見る間]。その、息子が、その時は、まだ、亡くなったいうこともわからなくって。あの…、あ、これはおかしいなあと思って。まあ、仮に、私と同じような状態であったとしても、すごく、あの、お、どう言うんですか、用心深い子だから、体力消耗してはいけないからと思って、なんか、怪我でもして、我慢してるのではないかなあ、という感覚がちょっとよぎったんですね。それで、まあ、後でわかった話ですけれど、あの、昔の家は、電柱のような梁が台風よけのために、台風の時の重しになるために、電柱のような梁が入ってるんです。それが、息子は、物のあるところは怖いって言うて、家具のないところへ寝てたもんですから、それがまともに落ちて、即死だったらしいんですね。あの、検死の結果では、即死ですっていうことだったらしいんです。

(9) [9：58]

で、あの翌日、レスキュー隊がやっと来てくれて、あの、当日なんか、全然、その、誰も、その、それこそ、ボランティアとか近所の方のボランティアによって、あの、瓦礫ものける、そういう作業はしてもらいましたけど。あの、行政とか、それからあの、どう言うんですか、あの、自衛隊とか、その、各レスキュー隊とか、そういうのは全然、その、当日はなくって、みな自力で、家族やそんなんで近所の人たちで、一生懸命、瓦礫をのけたわけなんですね。で、翌日の日に、息子は、あの、レスキュー隊が来てくれて、あの、引っ張り出してもらって、そして、あの、近くの、商船大学言うて、あの、有名な商船大学ですけどね。そこの体育館とか、あの、大きな部屋を、あの、お借りして、そこへ一応安置さしてもらったんですけど。

(10) [11：00]

その時に、1階に100人、2階に100人、亡くなった人がずうっと並べてあったんです。それも、あの、お棺なんか間にあいません。だから、何日間かそのまま、ずうーと並べて寝かしてあったらしいんです。そしたら、その時に、あの、娘が、あの、それも娘は、最近になってやっと話をするようになったんですけど。自分の弟のことも、だから、あの、お母さんって、200人もの人

がね、亡くなってるとこへね、行ったらね、何とも言えん霊気とかね。その、どう言うんですか、胸を圧迫されるようなね、その、冷たい冷たいね、雰囲気の中なのよって。おってやりたくても、おれなかったのよって。皆がね、無念な気持ちで、あの、赤ちゃんから年寄りまでいますからね。だから、特に若い人なんか残念だった。その想いが充満してるわけなんですよね。で、あの、「到底おれなかったのよっ」と、「おってやりたかったけどっ」て、それは、何回も娘が言ってましたけど。

(11) [12：09]

そんな状態の中で、あの、やっと、2週間目に、あの、火葬に回していただけた。それも夜中に電話をかけまわって、やっとかかって、事情をお話しして、それでなかったら、あの4週間、1ヶ月、それ以上待たなきゃいけない。そんな状態、状態だったらしいんです。あの、火葬場が一杯で。特に、あの、東灘は亡くなった人が多かったので、あの、小さな火葬場しかありませんから、順番がなかなかまわってこなくって、そんな状態の中で…。

(12) [12：52]

ちょうど、助け出してもらった時が、夜の7時でした。で、もう、あの、外はもちろん、あの、震災の当日ですから、街灯もついてません。で、戸板に載せられて、あの、空を見ると、星ひとつない、真っ暗闇の中でした。で、はあ、こんなに暗いんだなあと、思いながら、あの、6人ほどで担いでもらって、戸板に載せられて避難所へ行って、ほいで、診てもらったら、あの、「右足の足首から折れてますね」って、ほんで、副木を当ててもらって、くくってもらって、病院行ったら、そしたら、あの、傷してても、消毒の薬もありません。で、点滴も、普通1時間ぐらいで入るのを、12時間もたすわけですよね。だから、もう身体がクタクタって言うか、もう、憔悴しきってるところへもってきて、12時間分、こうして、同じ姿勢で、ずうっと、で、それがすんだら、また、12時間。1日に2本しか、点滴が、あの、してもらえないんですね。

(13) [14：04]

で、あの、ここにいたら、あの、ダメだなっという娘の判断もあったんですけど、動かすこともできないわけです。道路がもう車なんか通れるような状態でないので、で、どうしようかと思ってたら、そしたら、3日後の日に、あの、病院側が「ここは透析の部屋ですから空けて下さい、15分以内に空けて下さい」って言われたのには、娘がびっくりしてしまって、この状況で電話かけるのにも、1時間、それに、15分で、どうして動けるんですかって、せめて半日位待って下さいって頼んで、そして、方々、あの、電話をして、やっと、あの、尼崎っていうところの病院まで連れていっていただいたんですけど。

(14) [14：49]

その時に、あの、普通だったら、30分もあったら十分行ける、どこ、あの、場所を、9時間かかったんです。だから、お昼に出て、晩の9時までかかって、病院へ着いて、そして、診察して

もらったら、結局は、右足の神経が完全に麻痺してしまってるから、右足の付け根から、これは切断ですね、って言われたんです。で、あの、娘はそのこと私に言いませんでしたけど、あの、まあ、命が助かったら、右足の片方くらいなくても仕方がないという、あの、もう、観念は、娘はしてたらしいんですね。ところが幸いにして、あの、神戸で、地震にあわれた先生が主治医だったのと、そして、あの…、その、いろんな状況が、わかって下さってる先生だったので、すごく、あの、よくしていただいて。もう、ほんとに、あの、一生懸命リハビリをして、そして、今では、こうして、まあ、なんとか、歩けるようにはなってます。まだ、右足は、痺れは残ってます。

(15) [16：01]

でも、あたしが、今、あの、思うのに、あの、天災はね、どうしようもないんです。防ぎようがないんです。ただ、その天災を、あの、どう言うんですか、避けることはできなくっても、自分たちで、その、震度いかんによったら自分の身を守る、命を守るいうことはね、いつも頭に置いといて欲しいと思うんです。というのは、あの、私もこの間、震度4ぐらいの、ちょっと地震があった時に、あっ、これは大きいぞと思って、枕元に、あの、お客さん用の分厚いお座布団ありますね。綿のわたの入った。あれをね、頭の上、パッとのっけたんですよ。そしたら、なんか気分的にね、何かね、あ、これがあったら、頭は大丈夫という、その、気持ちが働いたのか、ね、なんかね、あの、気分的にちょっと落ち着いてみたいな、感じなので、それと、もう、あの、いつも枕元には、さっと揺った時に、パッと着れる一通りのものは、あの、きっちり重ねてたたんで、置いてあります。でないと、あの、まあ、神戸の地震ほど、震度、あれは、7っていいますけど、7どころやなかったと思うんですよ。震度計が壊れる、壊れてって、壊れてたっていう話を聞きましたので。だから、あれだけの大きな地震だったら、どうしようもないと思います、私の経験上。

(16) [17：37]

だけどね、あの、私の家が壊れた時に、あの、裏側から裏口の方から、なんか、のぞけたらしいんですね。で、あの、ある男の人が、あの…、ああ、こういう言い方したら、ちょっといけないかもわからないんですけどね。まあ、娘の言葉を借りてそのまま言いますけど。「お母さん、角刈りにした男の人、お母さん、前の会社の人で、知り合いの人いる？」って言うから、「いやあ、どんな人かなあ、顔見ないとわからないよっ」て言うたら、その人はね、「お姉ちゃん、お姉ちゃん、あの、ここ、誰と誰と、あの埋まってんのや」って言われたらしいんですよ。それで、あの、「母と弟が埋まってます」って言うたら、「裏入れるで、誰か寝てるで」って、言ってくれたんですって。ほんでね、その時にね、あの、「お姉ちゃん、あの、わしとこな、親父もな、死んでな、冷めとうなってんねん。だからな、死んだもんをな、今な、慌てて出さんでもな、生きてる人を助けるためにな、わし、こないして周ってんねん。手伝うわ。だけどな、いっぺん裏行ってみ、足見えてるで」って言うてくれたので、娘が行ったら、もう、弟は冷たくなってたんですね。でも、一応、あの、足を叩いて、「聡、どうしてんの、起きなさい」って、一言言うて、

ほんで、パッと見たら、あの、テーブルが、あれだけ悲惨な状態であったのに、テーブルはそのまま立ってたっていうんです。だから、息子もひょっとして、最初の地震で、自分がハッと気がついて、そこへパッっと這いながらでも行って、頭を突っ込んでたら、もう、後の祭りですけど、助かったんじゃないかなあと思うから、あの、皆さんにもね、なんかの時には、机の下とか、そういうものは、そう簡単に、あの、潰れませんから、あの、この下へ、頭をつっこんで、で、手や足の一本は折れても、治ります。命さえあったら、どうにでもなるんです。だから、あの、そういうことを考えてといて欲しいと思うんです。

(17)［19：54］

で、それで、あの、ちょっと話が前後になりますが、あの…［メモを見る間］…何て言うんですか、あの地震、天災はね、仕方がないんですけど、あの、つい、うーん、2年ほど前ですか、よく、あの、子供が、あの、キレたからやったんやとか、その、おじいさん、おばあさんを殺したり、親を殺したり、そして、お友達をいじめて、あの、どう言うんですか、あの、死に追いやったりとか、いろんな、あの、事件が、一時期ものすごありました。その時に、私は、自分で、ああ、あないして、あの、無念な思いで、あの、たくさんの人が亡くなってる。だから、あの、せっかく、あの、持ってる大事な命、一つしかない命をね、無残にね、その、なくすようなことは、あってはならないと思って、その亡くなった人のたくさんの人の供養のためにと思って、私は語り部をしようという気持ちになったんです。

(18)［21：08］

というのは、あの、皆さんが、周囲で、誰かがその、2、3人が1人の人をいじめる、いじめてると仮にしましょう。そしたら、その時に、誰か1人が勇気を持って、「おい、やめろや、仲良くせなあかんやないか」と、殴られてもいいから、それだけの勇気を持って、その…、友達を諌める。それができない子なら、あの、人間としてちょっと、と言いたいのは、あの、大体、犬や畜生っていうのは、その時その時に腹がたったら、カッと人を噛む。それが、まあ習性ですね。ところが、犬なんかは訓練されたら、それはしません。でもね、あの、あの、人間はね、万物の霊長といわれる所以は、子供のころから両親に育てていただく間に、小さい時に、いろんなしつけを受けて、そして、大きくなって、あの、学校へ行くようになったら、学校でいろんなことを勉強して、そして、いろんな形で、理性っていうものが養っていかれるわけですね。だから、していいことと、悪いことの判断は、もう、できて当たり前の歳になってます。だから、自分たちが、その、どう言うんですか、あの、カッーとなるっていうのは、カッーとなった途端に2、3歩後ろへ下がって考える余裕がないとダメなんです。だから、昔の人は、犬畜生にも劣るって言うたのは、そのカッとなって行動にそれを移す。それは人間ではないっていうことなんですね。だから、そういう観点で、物事を冷静に、あの、考えて欲しいと思うんです。

(19)［23：09］

だから、あの、私が、病院へ最初運ばれた時は、あの、床に皆、寝かされたんですね。あの、

ベッドはもちろんないから、床にざあーッと寝かされてる時に、あの、あっちこっちでね、やっぱり小さい子供さんやらね、お年寄りが、次々とね、亡くなっていく状況をね、私はね、もう、それこそ、意識朦朧としてる中で、あの、看護婦さんか、身内の方か、何かわからないんですけど、何か大きな声で、「テルちゃん、テルちゃん、あんた、お母さんや、お姉さんのところへ行ってしまうのね、うわー」っていうて泣く声が聞こえたんです。だから、その時に、ああ、何か子供さんでもなくなったのかなあと思ってたら、私とおんなじ状態で、あの、運び込まれた人が、横で1時間ほどの間で、あの、それもね、大っきな声で、「わあ、おしっこがしたい。おなかがすいた。のどが渇いた。なんかちょうだい」いうて、大きな声で怒鳴ってたおばあちゃんが、その時に、娘がね、いいなって、あんなに大きな声が出せたら。お母さんなんかね、声も出ないのに、と思ってたんですって。そしたら、1時間のちにそのおばあちゃんが、もう息を引き取った。

(20)［24：32］

それで、娘も、あ、これは大変だと思って、この病院では、なんの治療もしてもらえないから、なんとかしなきゃ、という焦りがでてきたっていう話を娘がしてましたけど。そういう状況の中で、あっちでバタバタ、こっちでバタバタ足音がしだすと、次々と、その、亡くなっていってる様子が、なんか、あの、おぼろげながら、わかるんですね。で、あの、頭をすごく打った時には、その、意識が朦朧としてるっていうか、あの…、床に寝かされてたら、あの、重病人ばっかりですから。あの、病院は電気がついてます。そしたら、あの、蛍光灯が、ずうーと、こう、あるんですね。そしたら、自分の身体、45度、こう起き上がってくるんです。そしたら、蛍光灯が目の前に立つんですね。ほんで、はあーと、こう、身体が浮くんですよ。ほんで、やあ、これはなんだろうなあと思って、いやあ、気持ち悪いなあ、と思ってたら、娘がそれを感じて、身体を支えてくれたりして、自分は寝たままなんですけど、そういう意識になってしまうんです。で、やあ、ちょっと気持ち悪いなあと思いながら。あの…

(21)［25：48］

私は、娘と、その時に、いろんな話をした、全然覚えがないんですけど、うわごとみたいに奇妙なことを言うてたらしいんです。それは、後で聞かされたんですけど。あの、やっぱり頭のどこかで息子のことが気になってたかして、あの、娘に、あの、お母さん、ああ、あの、娘に、「聡、どうしてるの？」って言うたら、娘が「うん、寝てるよ」って言うたらしいんです。そしたら、私がまたね、あの、「何言ってるの、のんきなこと言うとらんと早く行って起こしてきてよっ」と、私がね、その、すごく今まで何にも言わなかったのに、急にね、怖い顔してね、「早く起こしてきてよ」って言うたもんで、娘がね、「お母さん、ごめんねって、もう車ねえ、お父ちゃん帰ってしまってないから、この暗い中、あの、真っ暗闇の中ね、歩いて家まで帰れないのよ。明日まで待ってね」って言うて、もうその時、死んでんのはわかってましたけど。その話を、私に出来なかったもんですから、もう、それで、なんか、あの、その後の、やっぱり普段心に思ってることを、いろんなことを5つ6つ矢継ぎ早に言ったっていうのは、娘から聞かされてます

けど…。

(22)［27：12］

うん…まあ、どう言うんですか…あの、話が飛びますけれど。何か順番にお話しようと、思ってたんですけど、なかなかそうはいかなくって。あの…［メモを見る間］…、ちょうど、あの、病院を移った後ですね。あの、その時に、あの、娘から、あの…、わかってるかわかってないかわからないけど、たぶんわかってるやろうなと思ったんでしょうね。「お母さん、聡、ダメだったのよお」って。一言、それは、あの、聞かされたのは、あの、未だに、その言葉も雰囲気も頭に残ってますけど。あの、その病院の中っていうのは、あの、まあ、ガンの患者さんが多くて腸や胃を切除して重病人ばっかりだったので、そこで泣くこともできませんし、動くこともできませんので、もう、ただ涙を流すだけでした。で、その時に、あの、娘が、あの…、「14日目に、あの、荼毘に付すことが、なんとか決まったからね。お母さん」って言うて、で、それだけ言うといて、あの人もいろんな用事があるので飛んで帰ったんですけれども。もう、その後で、あの、気持ちのもって行き場がなくって、もう布団をパッと頭から被って暫く泣いてましたね。で［涙声に］、あの……悲しみが大きいと…［ほぼ通常の声に戻って］…あの、人間の涙っていうのは、ある程度泣いたら、それでおさまるかなあと、私は思ってたんですけど。でも、どう言うんですか…、

(23)［29：20］

あの［涙声に］…、我が子を亡くした悲しみっていうのは、みなさんが大人になって、特に女の子は、あの、お母さんになって、子供生んで、子供を育てる段階になって初めて、その、自分が親にこういう形で、こういう愛情をかけて育てていただいたっていう気持ちがね、［元の声に戻って］絶対わかるときが来るんです。母親っていうのは、あの、いくらお産が大変いうても、死ぬような思いして子供を生んで、そして、その子供のかわいさで、その、大変だった、あの、お産の苦しみも全部きれいに不思議に忘れてしまえてるんですね。それほど子供に愛情をかけて、あの、子供を育ててきてます。だから、お父さんやお母さんに、あの、中学生になったらね、親離れをして子離れをして、あの、もの言わないんだっていうのは、それは考えもんだと思うんです。やっぱり、お父さん、お母さんがあって、そして、今の自分があるということを考えた時に、なるべく、あの、もちろん、おじいちゃん、おばあちゃんもそうですけど、特に、おじいちゃん、おばあちゃんには、今いらっしゃる時にいろんなことを聞いて吸収しておく。そしたら、それがね、後々いろんな役にたつから。私はこの歳になっても、今、後悔してることがいっぱいあるんです。もっと、あの、母が生きてる間に、いろんなことを聞いておけばよかったなあ、っていう思いが今してますので。だから、時間があれば、あの、勉強に忙しくても、あの、なるべく、お父さん、お母さんに、これはどう、どうなの、これはどうしたらいいの、とか、その、昔のこととか、あの、現実に今起こってることでもね、あの、なんでも、お父さん、お母さんに、あの、話をする。そういうね、姿勢を持って欲しいと思うんです。

(24) [31：27]

ほんで、今、世間一般で、おじいちゃん、おばあちゃん、ほんとさびしくなってます。なぜいうたら、あの、子供たちと一緒に暮らしてません。一人暮らしの人が多いですから。だから、皆さんが道を歩いてたり、近所のおじいちゃん、おばあちゃん見た時に、「こんにちは」って声をかけたげたら、それがね、そういうことがきっかけでね、おじいちゃん、おばあちゃんがね、やっぱり、あッ、若い子が声をかけてくれた、うれしいなっていうことが生きがいにつながっていくゆう場合もあるんです。そしたら、それが、小さなボランティアになるわけですよね。声をかけることが。だけでも、だけでも言うたらおかしいですけど。だから、あの、別にボランティアっていうのは、身体を持っていって自分で一生懸命労働して、そればかりがボランティアではないわけですね。だから、自分がほんとに、心から、優しさを、その相手にぶつけていく。それが、ひとつのボランティアの形もあると思うんです。ほんで、ボランティアっていうのは、一生懸命、私はね、人のためにしてるんだっていうんじゃなくって、一応はそうではあってもね、必ずそれは、自分のためにしてることに、自分に返ってくるっていうことを、頭に置いておいて欲しいと思うんです。

(25) [32：47]

で、あの…［メモを見る間］…、私が、あの、ほんとにね、こうして、あの、中学生の方なんかとお話できるのがうれしいのはね、あの、娘や息子が、中学時代のことを、ほっと、あの、タイムスリップして、思い出すことがあるんです。あの、ちょうどね、あの、娘が中3、息子が中1の時にね、あの、主人が亡くなったんです。あの子たちのお父さんが病死しました。だから、一番大変な時に、それでも、やっぱり中学生活っていうのは、初めて、まあ、もちろん初めてですけど、大変っていうのが、頭にあったから、部活は決めないといけない。で、その時に、あの、子供と、あの、精神的に弱い子になってもらったら困るという気持ちがありましたんで、部活を選ぶのなら、3年間絶対に頑張んなさいと、途中でやめるということは、お母さんは許せませんと。頑張ることがね、結局自分の、その、今後の生活に、いろいろとプラスアルファになるから、「頑張んなさいっ」と言うて、あの、卓球部を選んだんですね。

(26) [34：10]

そしたら、やっぱり、あの、皆さんもわかってると思います。今、ちょうど、中間ですね、先輩がいて、後輩がいて。だから、あの、先輩と後輩との間に挟まれてます。私もね、息子からいろいろ聞いてわかるんですけど、でもね、あの、先輩が仮に意地悪をして、としましょう。それでも自分たちがそんな目にあったら、自分も絶対に先輩になったら、後輩いじめたるぞッていう気持ちじゃなくって、自分が置かれた立場をもう一辺反省してみて、後輩をかわいがってやる。そしたら、「あ、あの先輩は」というて尊敬される先輩になる。［笑い声で］うふっ。と思いません？　ふふ。これはね、私が勝手にね、思ってるんですけど。息子の話を聞いた上で。［元の声に戻って］何か、高校へ行ったら、また、その部活が変わるんですね。で、あの、先輩にね、中学どころじゃなくて、すごく、あの、大変だったらしいんです。まあ、それは、皆さんが高校行

ってからの楽しみにしておきますけど。結局、その高校生活の間で、その、先輩に教えてもらったことが、言葉遣いを、敬語をきっちり使うこというのを教えてもらったらしいんです。だから、社会人になった時に、あの、やっぱり、何かそれがすごく役にたったということを、私自身は子供からはそれは聞いてませんが、勤めに行った先の方からそういうて、あの、「目上の人に対する言葉遣いができてるからね、いい子だね」って言うていただいた時に、私は、「ああよかったなっ」と思います。だから、あの、部活、絶対に途中で挫折しないで、中学3年、高校3年、あの、頑張ってして欲しいと思うんです。それが、あの、後になって自分たちのすごくプラスになると思います。

(27)［36：19］

…［メモを見る間］…それとね、あの、どんな時にどんな地震があるかわかりません。で、こないだも、ある人がね、あの、マンション住まいの人が話をしてくれましたけど、あの、なんか、あの、必ず出口を、まず開けておく。マンションだったらね、あの、えー、外開きの戸は、中からドーンと何か物をぶつけてでもいいから、あの、出口をちゃんと作っておかないと。高層になると、あの、逃げ場がないですね。窓から逃げたら下へ落ちてしまいますからね。だから、必ず、出口、入口、そういうところを、必ず、あの、確保する。まず第1はそれだと、言うておられましたね。私らみたいに、あの、木造の2階建ての家だったら、どっからでも、まあ、仮に潰れなかったとすると、逃げられますけど。マンションは、その、あの、大変だったんですよって、言うておられました。

(28)［37：28］

それと、あの、履き物。あのね、すごい地震の時はね、あの、ガラスが、ずっと割れて、そこらが瓦礫だらけになるんですね。で、それを慌てて歩いて、ものすごい大怪我した人がいっぱいいるらしいです。だから、必ず、あの、足元を気をつけることとか。もう、これはね、あの、語り部のおばあちゃんがこんな話しとったいうこと、頭の中に入れといてもらったら、何かの時に役にたつと思いますので。あの、頭入れといて下さい。

(29)［38：02］

んと、それとね、地震の当日の話をね、しますけど。あの、私の家の近くにね、あの、うーん深江駅って、阪神の深江って駅があるんです。で、そこでね、ちょっと地震の2分前に、あの、プラットホームに出勤しようと思って立ってた人がね、あの、ちょうどね、1分くらい前にね、ゴォォーっていう音がしてね、あの、青い光がバァァーと走ったんですって。ほんな、その瞬間にね、ドーンとね、上へ階段持ち上げられて、プラットホームの天井へ突き当たって、ほんで、下へ、ターッと叩きつけられてね、その方はね、まだ30代ぐらいの若い人でしたから、えぇーと叩きつけられた途端に起き上がって、これは何やと、車でも飛び込んできたんかと思ったんですって。そしてね、うん、なにが、なにが起きたかわからないから思って、駅の階段を降りて下へ行ったら、家がみなつぶれてる。これは、エライことやって、あの、家へ飛んで帰ったという話

なんかをね、聞いてます。

(30) [39：18]

だから、あの、あの地震だけは、ほんとに、あの、なんか、ちょうど、稲光が、何千も集まったみたいな光が、西の方に走ったとかね。あの、それは、大型のトラックの運転してらっしゃる方が、今から出ようと思ってハンドルを握って、あの、アクセルっていうか、あの、出ようと思った時に、ゴォォーっていう音がして、西の方で、ものすごい稲光が、それこそ、二千や、あの、百や、二百とちゃう、何千っていうような、ウワアって走ったんですって。「ええ、やあ、これはなんや」と思って、そのまま、あの、止まっててよかったと。「それで発進してたら、絶対にボクは命なかったと思います」、言わはって、こないだ。そういう話はね、あの、最近になってね、よくね、「地震の時はこうだった」、「ああだった」っていうて、出てくるんです。

(31) [40：13]

ほいで、もう、亡くなった方は、いまだに、その、私なんか息子の顔を見てません。死んだ顔も見てませんし、姿も見てません。お、お骨になって初めて、あの、三十五日の日に、あの、そういう息子と対面して、もう、あの、お骨を抱きしめて思いっきり泣きました。だから、顔を見てませんから… [涙声に]、みなさんの前でこうして、あの、いろんなお話が出来るんですけど、子供を亡くしてその子供の姿や顔を見てる人は、おそらく何年たっても、心開いて、ああだこうだと、話をあまりできないと思うんです。

(32) [41：02]

[元の声に戻って] だから、もう、ただ、私が申し上げたいのは、あの…、まあ、せっかく、お父さんやお母さん、皆なで、あの、育んでいただいた大事な命ですから、あの、できるだけ、あの、お父さんやお母さんに迷惑かけないように、まかり間違って、自分たちが、何かことを起こしたり、その怪我をしたり、いろんな目にあって障害が残るとね。あの、植物人間になったり、片足や片手がなくなったり、いろいろなことになると、それこそどんなに親不孝かけるかわかりません。だから、自分の命をほんとに大切にして欲しいと思います。

(33) [41：52]

では、一応、この辺で、私の話は、おわ、終わらせていただきます。ありがとうございました。

Ⅲ 浅井さんの語り

(1) [0：00]

こんにちは。もう、寒いですけど、もう少しお話を聞いて下さい。あ、私は、先ほど先生から、ご説明ありました御影より数分のところ、灘というところで、今、パンダがいるところに、地震

まで住んでおりました。その時、その時点の家族はですね、夫、私、大学生、高校生の男の子が2人と、亡くした小5の娘でした。

(2) [0：33]

住んでいたお家（うち）は、私が生まれた家でして、すごい、まあ、もう、いいおばさんなんで、築何十年のお家で、でもう、今、い、今、現在、もうないようなお家で、んー、や、梁っていうんですか。先ほど庄野さんが仰ったように、屋根の上の梁っていう柱になるところは、大人の人が2人抱えても廻らないぐらい太い梁、そして、床の間…、昔の家ですから床の間がありまして、床の間の柱は、私も、みがか…磨かされましたけれども、黒光りして、それまで私にとっては自慢の家でした。広くて便利が良くて、押し入れもたくさんあり、子供が遊ぶとこも広くて、今に…皆な、子供はマンションがいいって申してましたけれども、私はそこが自慢でした。でも、その家（うち）で私は、むす…、娘を、殺されたというか、自分で、まあ…、死なしてしまったと、今、すごく後悔しています…。

(3) [1：38]

あの日は、本当に、先ほど説明がありましたように、大変寒い日で、その時、高校野球をしている次男のお弁当を作ろうかなっと思ってたんですけど、すごく寒くて、もう起きるのが嫌だなーとか思いながら、お布団の中でゴソゴソしてる時に、あの揺れが始まりました。先ほど、庄野さんが仰ったように、地震は確かに、それまで神戸に何度かありましたけれども、神戸という所は、地震にあうことが少なかったので、まさかあのような大惨事になるような地震だって思っておりませんでしたので、でも、ちょっと、かん…、だ、からだが感じた時に、この地震は今までと違うと思いまして、横に寝ている娘を起こしまして抱きかかえて、「地震だから起きなさい」と言ったところまでは覚えてるんですけれども、それ以後は、もう全然、もう記憶というか、もう、気を失って、わかりません。

(4) [2：37]

そして、これは［自宅の写真がスクリーン投影される］、きっとあれですよ、ね、あれが、私の家で、私は、娘と2人、あの下に埋まってました。だから、先ほど庄野さんが仰ったように、かすかに外界というか、外では、家族が一生懸命、救助活動をしてたと思うんですけど、中にいる私たち2人にとっては、もう、ただ暗いだけ、真っ暗なだけ、そして…古い家でしたので、土壁が口の中に入り、梁が…後でわかったことですけど、梁が体の上に乗り、痛いだけ。でも、その中で、私の、ぼ、その気を失っているのが、ボーっとした頭の中で、一体何が起きたんだろうと思っている時に、娘の、か細い声で、「お母さーん、お母さーん」て聞こえるんです。でも、真っ暗だから、どこにいるのかわからない。で、宙に浮く手で触ると、ちょうど手が届く、ほんの手が届くところに、娘の手がありまして、「大丈夫？」て言うと、「痛い！痛い！」て言うんです。でも、痛いっと言いましても、真っ暗だから何もわかりません。手探りをしても何もわからないです。でも、その時の男3人は屈強で、すごく175も身長あり、体重も90とか85、75とか、

たくさん、あの、あの、大男といいますか、大きいもんですから、すぐに「お兄ちゃんが助けてくれるよ、お父さんが出してくれるよ」と励ましてたんですけど、でも、時間はわからないけど、娘は痛がる、私も痛い、苦しい。でも、だーれも何にもしてくれないので…、お互いに私が気を失う時には、娘が「お母さん」と呼び、娘が返事をしない時には、真っ暗な中で「亜希子、亜希子」って呼びかけました。その時に、きっと寝たら、雪、雪の時に死ぬように、死んでしまうのではないかと思うので、私は、「寝たらダメ、ダメ」って、必死に励ましました、娘のことを。

(5)［4：51］

そのうち、頭の上が、ガサゴソ、ガサゴソって、音がするので、その辺に、何があるかわからないんですけども、ドンドンと、「ここにいるよ、ここにいるよ」っていう感じで家族に知らせてたつもりなんですけれども、まあ、外とか、全然聞こえてなかったということなんですね。でも、その真っ暗闇の中に、ある、突然、ポカッと、こう埋まってました時に、青いものが浮かび、そのうちに、目を刺すような光が入ってき、でも、それは、それだけ、長いこと埋まっていた頭の中の思考力では判断できずに、ただ、ボーっとしてたら、その助け出してくれた人が、「あと、何人いるんだ！」ということで、「娘が1人残ってます」ってことで、「早く出ろ」ということで引っ張りだされ、それから、娘は、どれくらい経ったかわからないぐらいの時に助けられました。でも、「ああー、助かった」って思いました。なぜかというと、娘は男の子の下だから、食欲もありました。だから、「お母さーん、お腹すいた、喉乾いた」って一言、第一声がそうだったので、「あー、助かった！ご飯は食べたいし、喉も乾いてるし、はっきり意識がある」と思ったので、すごく、私はホッとしました。しかし、足を見ました。足は、ま、紫色で死んでいました。でも、足なん…、その時は、足なんかいいっと思いました。足がなくたって生きれる。手が折れたって大丈夫。人間として、どこかなくなったって、命さえ助かったらって、思いました。

(6)［6：29］

でも、まず、そういう状態でしたので、近所の病院に行くことにしました。その病院は、それまで、んー、1年くらい前に建てかえて、最新式の様式になってまして、自家発電、貯水塔、最新の薬品棚、備蓄もちゃんとしてますので、何があっても数ヶ月は大丈夫という病院でした。でも、行ったところは、水は水道管破裂、薬棚は倒れ薬品はゼロ、停電、そういう状態の病院に、ケガ人はどんどん運び来まれます。床にも寝かされています。そのままです。駐車場にも裸のまま寝てます。いたる所に、ケガ人、死人、そういう人がたくさん寝てます。そして、そういう状態ですので、交通網が破裂してますので、医師も看護婦も来ません。残っている宿直の先生と看護婦さんだけです。でも、その医療関係者の方は、必死に治療していただきました。あの時の医療関係の方には、私は不服はありません。あれだけの人数で、あれだけの人間を、この、体育館以上の人、の、ケガ人を看護するのは、1人何人担当するかわかりません。

(7)［8：02］

その中で、娘が、「背中が痛い、背中が痛い」と訴えます。一応、その時、医師という、真っ

暗ですので、わからないんですけど、白い白衣を着ている人をつかまえて、「娘が背中を痛がってます」と訴えました。でも、「今、何もない、レントゲンも何もない、だからはっきりしたことは言えない。でも、背骨がもしかしたら損傷、損傷しているかもしれないので、そこで安静にして下さい」。安静といっても、ただ、こういう所［体育館の床］に寝かされるだけです。注射もありません。そういう状態で寝ていると、私の妹の主人が、家が古いということを知ってますので、見に来ました。病院で対面した時、その、病院を見まして、この病院にいたら、絶対、亜希子は死んでしまう。山の向こうは、まだ地震であっても、正常な所もあるので、山の向こうに行かないか、ということになりました。でも、医療関係の方は、「ここを動かすと、すぐに死んでしまうかもわからない」と言われました。でも…、しゅ、妹の主人は、ここで何もせずに死んでしまうのと、移動して、たし、確かに命をなく、なくなるかもしれないけれども、めいいっぱいお姉さんが治療したということの、満足感って言いますか、親としての努めを、はた、果たせたということだけでもいいんではないか、ということで、その病院に行くことになりました。

(8)［9：48］

山を越えた街が、家も損壊せず、山は緑が、静かな落ち着いただけでした。病院に連絡を、携帯で、主人に、あっ、妹の主人が、叔父さんが入れてましたので、すぐ治療にかかっていただけました。その時についた病名が、クラッシュ・シンドロームという診断と、呼ばれました。それは事故で、強い圧迫された場所が…、その、助けられた時に、血がめぐった時に、血液中に有害な物質がめぐることによって、多臓器が不全になるという診断です。まず、娘も肝臓がやられました。そして、尿が出なくなりました。尿が出ないということは、尿毒素ということになりまして、体中がパンパンに風船のように腫れます。そのうち、肝臓、肺、そして心臓に至るまで、いくので、口からは酸素吸入、点滴…いろいろな管（かん）をつけられながら、娘は頑張りました…。

(9)［11：08］

なかなか、そういう状態になりますと、会えた時も、ありましたけど、だんだんと病原菌が入るということで、会える機会も少なくなります。だから、窓の外から様子を見るだけ。でも、どんだけ頑張っても、やはり……ダメで、した［小さな声で］。娘は、2月10日、朝と夕方の違いはありましたけれども、5時45分に亡くなりました…。確かに、地震は、天災かもしれないけれども、私にとっては、自分が生まれた家に、自分が楽であり、自分が楽しかったから住んだんであって、娘が住みたくてそこに生まれたわけではないので、何だか、私が自分では、娘も自分の意志、自分の勝手で殺したんではないかと、ずっと今まで思っています。

(10)［12：21］

そして、娘は学区で、ただ1人亡くなりました。だから、その姿を見るのが嫌で、私はその街を離れました。娘は、私の親族の中では初めての女の子でしたので、父親に可愛がられ、私どものおじいちゃん、おばあちゃんにも可愛がられ、兄2人も年が離れていますので、可愛がられて、

皆に甘やかされて好き放題のことをしてきていました。上の兄には年が離れて大学生ですので、勉強を教えてもらい、下の兄は野球をしていましたので、スポーツが万能で、したので、スポーツで鍛えられ、高校野球の球を受けて投げてるので、硬球を投げてますので、少々の男の子には負けません。身体も大きいので、5年生でしたけれども、6せん…、6年の男の子にも負けないぐらい、おてんばでした。

(11)［13：28］

でも、その甘えん坊であって、私にとっては、私がいなければ何もできないと思っていた娘に、命の最後の戦いで、人間はどんなに頑張れるものか、命を生きることがどんなに大切なことか、ということを、私に、目の前で教えていきました。そして、人として、最後に人間として喋れた言葉で、手術に入る前に、「お母さん、泣いたらあかん。私、大丈夫やから」［非常に大きな声で］って、はっきり［非常に大きな声で］言いました。その言葉は、私が2人で病院で会えなくても、た、命の戦いをしている間、窓越しで会えずに、娘の管（かん）だらけの、管（くだ）だらけの姿を見ている間も、私の心の支えでした。その言葉を頼りに、今まで、私は、ずっと自分を支えてきました。毎日、泣きたい、辛い時には、あれだけ苦しい思いをさした娘のために、自分が泣くのは卑怯だと思いました。同じ瓦礫に埋まり、同じ症状を持ち、それでも私は生き残りました。そして、娘は、人間が生きるために努力することの大切さ、私が手助けをしなければ、人に頼らなければ生きていないと思っていたむす…、おさ…、幼い娘の…、命の大切さということを皆様にお伝えしたくて、いつもこういう風にお話させていただいてます……。

(12)［15：28］

心が健康だだったら、身体も健康です。身体が健康だったら、心も健康になります。だから、皆さんも、心も身体も鍛えて、元気に生きて下さい。そして、何よりも、どんなことよりも、命を大切にして下さい。命は2度と手に入れられないものです。勉強は努力したらできます。運動も努力したらできます。どんなことも、自分の努力で、向上することはできます。［大きな声で］命は、誰からももらうことができません。［非常に大きな声で］命は自分のものです。だから、そして、2度と私のように子供に先立たれて、悲しい思いをする親をつくらないで下さい。そして、血を、肉を、分けて生んでくれたお母さんを嘆かせないようにして下さい。どんな時にも、命だけは、2度と手に入れることはできないので、皆様、どんなことよりも命を、命を大事にして下さい。

(13)［15：57］

どうも、今日はありがとうございました。

Ⅳ　長谷川さんの語り

(1)［0：00］

ちょっと、ちょっとごめんな。今から準備するから。それまで待ってなぁ。［語り手の帽子等を見て多くの児童の歓声］ごめんにゃー。［児童の笑い声］

(2)［0：32］

ほな、今から、お話しをさせていただきます。…［児童の雑談］…この帽子を被らんことには今日の話が進まへんの。それと、この上着をぬが…、ぬ、ぬがん、これは［上着からセーターに］、避難所時代、後藤先生とお会いした折に、このセーターを着てたの。ほいで、この帽子を被って一生懸命、この、こういう学校に避難している人たちをお世話してたの。ボランティアの人たちと、一緒に。その時、あの、皆の一番上に立ってやってたんで、その時、後藤先生の母校だったところに、避難してたん。後藤先生が訪ねてこられた。そこで、どんなお話しをしたか、忘れてしまってんの。7年前やからな。自分たちも、3年前のこと覚えてるかな？［数名の児童の声］覚えてないやろう。ほら、こんなジジイになったら、7年前のことほとんど忘れてしまってるの。でも、あの、そういう時の、大事な大事な、あの、励ましの言葉、そういうものを、あの、ジジイが保管してたんで、今日お持ちしたの。

(3)［1：51］

だから、一番初めに、み…、あの、から、お話しさせてもらうけども、この千羽鶴、今こんなに、小ーさな千羽鶴やけども、初めはこんな大きな房であったわけ。で、あの、避難、あの、学校に避難してるいうことは、こういう教室に避難してるわけやんか。で、体育館であり、教室であり、皆な、バラバラに避難してるわけやから。ほな、こんな千羽鶴、大きな千羽鶴、やっぱし、皆なに見てほしい。被災者の人に、皆なに見てほしい。そのために、大ーきな千羽鶴を少しずつ分けて、各教室に配っていったの。だから、この千羽鶴も1つ1つ、「頑張ってよ」、あの、「何とか頑張ってよ」という思いを込めて作られたの。もう、ものすご、大切な、思いのこもった千羽鶴やから、だから、あの、この教…、あの、この教室に配り分けた、ごく一部だけね。このジジイが持ってたんで、今日こないして持って、あの、来たの。だから、これは、大切な皆なの気持ちがこもってる。ほんとうに神戸の被災者の人は、「頑張って下さいよー」、「負けないで下さいよー」、言うて。どういう、どういうの、大切な、あの、千羽鶴。だから、これも大切に残しておきたいな。

(4)［3：16］

それからな、もう1つ。この、ここの、この学校のやつ［同小からの寄せ書き］よりも前に見てほしいものがあるの。去年9月、ニューヨークでビルが、あの、壊れたのな。あそこの、ニューヨークから、こういう寄せ書きが来てるわけ。でも、これが未だにわれわれ、こんな寄せ書きもらってるんだけれども、お返しはできない。ここにな、英語、世界の各国、各国、あの、各、

あの、国の言葉で書かれたやつを日本語に訳して、このように、この、構成されて、避難…、うん、ん、ジジイの避難所に届いたわけ。でも、これは嬉しかったな。世界の人たちに心配かけてるんや。頑張らんといかんいうの。そういう思いがものすごいあるわけ。だから、これも大事にしておるけど。でも、いずれ、ニューヨークの人たちが、今大変困ってるやんか。それで亡くなった人たちも、大勢6000人近くの人もいると、いうことなん。神戸の6400何人、一緒に亡くなってる、同んなじ規模なん。だか、向こうの人たちも。

(5)［4：28］

ほな、自分たち、お父ちゃん、お母ちゃんがなくなったらどう思う？［悲しい（児童数名の返答）］悲しいやろ。自分たちだけが生き残ってしまったら、甘えるお父ちゃん、お母ちゃんがいなかったら、どうする？　大変やんか。でも、神戸で500何人という、自分たちぐらいの時に、震災で、お父ちゃん、お母ちゃん亡くなって１人ぽっちなってしまっている、あの、お兄ちゃん、お姉ちゃんな、自分たちぐらいの子が、まだ、たっくさんいるの。それは、この市原のおばちゃんから、またお話しがでてくると思うんで。

(6)［5：05］

な。だから、これ［ニューヨークからの寄せ書き］が、そういう形で、だから、世界中から神戸の地震、そういう亡くなって、あの、われわれに対して、「頑張りなさい」、あの、［大きな声で］「負けたらあかんでー」、いう言葉で、あの、寄せ書きが寄せられた。これは食べ物よりもどんな形よりもな、こういう言葉の寄せが…、あの、この、あの支援というのも、これを、じ、じ、地震で、ほんとに被害を受けて、心も、こない［身を縮める仕草］、小っさく小っさくなってる折に、こういうものが本当に勇気づけられるいうことなんです。

(7)［5：42］

あっ、どうもおおきにな［同小からの寄せ書きが飾られる］。それで…、今から登場するのんが、これが、７年前、小学…、あの、ここの小学校２年生、後藤先生のクラスの、あの、子たち、あの、これ、寄せ書きを書いてもらったの。この寄せ書きいうのんが、ほんとうに、寒いだろうけど、風邪ひかないで頑張って下さい。また、自分たちは何にもできませんけども、何とか頑張ってよ、そういうこと、書かれてる。でもな、これを読んでな、あっ、こんなと。見ず知らずの小さな子どもたちにまで、われわれのことを心配さしてるんだなぁ。何とか頑張らんといかん。何とか、頑張って生きていこう。先を見ていこう。いつまでもクヨクヨしとったらいかんのや。そういう思いで、今まで、この、話し…、大事にお話、し、させてもらったの。だから、こ、これ、すんません。ここに、ちょっと貼りつけて、置いといてもらえる［寄せ書きを黒板に掲示］。もう、それが一番いいと思う。

(8)［6：50］

せやけに、われわれとしては、このー、ひ、あのー、寄せ書きというのんは、どんな救援物資、

食べ物などをな、あの、なんせルートがつけば、あの、ずーっと、初めはわずかの食べ物であっても、ここに避難所がある、ここへ食糧を運ばんといかん、物資を運ばんといかんということがわかれば、その、2、3日後には、どんどんどんどん、物資、食べ物は、多く運ばれてくるわけ。でも、こういう心のこもった寄せ書きというのんは、ほんとに、数少ないわけよ。でも、各避難所では、ずーっと行き、行き渡ってるんだけれども、こんなものが、1つ2つしか、あの、各避難所には残ってないわけよ。神戸市内の、あの、その、被災地域の中ではな。だから、これは、1つの、この避難所としては、もーのすごい、すばらしい贈り物。われわれにしたら、心の贈り物。

(9)［7：56］

で、その時に、今、後藤先生がお話しされたように、その、な、あの、後藤先生が見て、あの、感じたことを自分たち、あの、皆にお話しして、それを、あの、自分たちのお兄ちゃん、お姉ちゃんたち、こないに書いてくれたわけよ。だからな、ものすごい嬉しかったよ。それで、こう、後藤先生、自分、あのー、7年前のことやけども、これ、受け取った折、儂、泣いたと思うんですけども。［「ああ、それねえ、顔がね」（後藤先生）］あー。［「すごく、まあ、喜んでおられるなあ、ゆうの、わかったけど」（後藤先生）］うーん。［「まあ、何かほんとによく持って来てよかったなあ、いう感じは受けて帰りましたけど…」（後藤先生）］そやけに、あの折、自分は、その折、うっと、支援物資はいろいろいただくけども、でも、こういう、心のこもった、些細なものであっても、自分としては、もう、本当に心の御馳走として、あの、ありがたく涙がでる、今、思い出すんやけども、そのような感じして、してるんです。だから、ほんとに、あの、後藤先生に苦労かけたなぁ、ほんとにお世話になったなぁ。ほいで、その当時の小学校2年生、今の中学2、年生かな。［「2年生、3年生です」（後藤先生）］3年生、［「3年生」（後藤先生）］の、お兄ちゃん、お姉ちゃんたちに、ほんとに、この「おおきに」とお礼を言いたいの。だから、今度は、あのー、家の近くで、中学3年生のお兄ちゃん、お姉ちゃんたちに会ったら、この神戸のジジイが、あの、「おおきによ」と言うといてな。頼むでー。［数名の子供たちが頷く］そやけに、お兄ちゃん、お姉ちゃんたちには、これはもう、直接言えないから。よろしゅうお願いしまーす。

(10)［9：38］

それで、あのー、一つは、避難所生活のお話、ちょっとさせてもらおうかな。あのー、その当時、避難所行って、教室入っても、17日、今日やな、7年前の今日、5時46分、自分たち起きてる？［「起きてる」（数名の児童の返事）］起きてた？［「起きてた」（数名の児童）］あ、そおー、すごいなー。おっちゃんは、まだ、夢の中やったな。［「おっちゃん、やって」（一人の児童）］あっ、ジジイやった。ごめん。あの、それで、あの、外は真っ暗け。そんな中で、地震、5時46分、に、地震が来る前、ジジイは、ちょっ、前の晩に新年会あって、ジジイになったら、お酒も飲むわなぁ。新年会で、お酒たらふく飲んどったから、トイレに、起きたんよ。5時半ごろに。で、トイレおき、で、起きて、自分の布団に、さあ、横になろう、横になって、少ししたら、ドーンと、思いいっきり揺れたわけ。そう。それを、あの…、［児童の笑声］、あ、そうやな、順番間違

った。

(11) [10：55]

ジジイは、神戸の三ノ宮、知ってるかな、皆な。[「うん、知ってる…」(複数の児童)] あっ、三ノ宮駅の山っ側に住んでた。それも、12月25日に三ノ宮の山っ側へ引っ越ししてきて。で、もう、あの、ここに引っ越ししてきましたいう届けも出さないうちに、1月17日、地震で、ドーン、受けた。ほな、ドーン揺れて、ガッタガタと揺れた折に、この、部屋の窓が、こないして [窓を指示]、錠前かけてないわけやから、ほな、窓が、運動、追っかけっこしてるわけ。窓ガラスが。ほな、外、見たら、牛乳を流したように真っ白になってるわけ。そいで、はじめ、地震やと思わない。何かなぁ、思った。どこの国が、今、日本を攻撃してきたんかいな。隣の大きな12、3階建てのビルがグラグラ揺れてる。自分の、あの、住んでるマンションもグラグラ揺れてる。ほな、あの、例えば、手で、あの、手で自分の身体を支えよう思っても、支える余裕がない。そんなぐらい激しい揺れだったの。けど、もう、そうすれば、ねん、あの、こないして蛍光灯が、ついてる、この灯がパチッ。それで、あの、時計をさわったら、時計がガシャン、ほな、上に物を置いてある物は、こう落ちる。ほいで、引越しして間がないものやから、ダンボールに詰めた荷物を押し入れにみな突っ込んでたの。その、押し入れに突っ込んでたダンボール箱が1メートル、2メートル、ボーンボーンと飛んで、飛んで来るんよ。そんな状態だったの。な、はじめ地震だとは思わない。もう、これ、どないなるんやろう、いう感覚しかない。揺れがおさまるまで、どないしよう、どないしよう。こんな、立っておられへん。座ってな、あぐらかいて座ったまま、身体をどないして両手で支えていいんや。そんな状況。

(12) [13：04]

で、揺れがおさまって、ほな、まあ、あの、その、部屋の中。真っ暗けやんか。自分の上を着るもんは1つもない。な、もう、肌着1枚で寝てた。そのままで、何せ、外へ出よう。外へ出るのに、自分のドアは開けられた。でも、今度は1…2階から、1階、1階に降りる階段は、1尺ほど、ガタンと落ちてる。自分の部屋の壁を、いうのんは…、あっ、1尺言うたってわからんな。ごめん。ジジイなったらな、こんなわからんこと言うてしまうんよ。そやけに、あの、部屋の壁がな、40センチほど、ベラーンと、こう剥がれてしまって、し、2階の部屋が見えるような状態。事実、見えたもん。2階の部屋の住んでる人の荷物も見えた。その、2階、2階の人はどうなったんかは、そらわからへんけどな。それで、自分、あの、ジジイが、3階から、あの、2階へ行って、2階から1階へ降りようとした。あのー、その、階段が30センチほど、ガターンと外れて、落ちてるわけ。それで、あの、天井から、こういう、あの、鉄筋の建物、鉄骨の建物で、コンクリの破片がゴロゴロ落ちてるわけ。それを、踏まないように、踏まないようにと、こういう感じで歩いて。ほな、外へ出てやな、身体が緊張してるから、肌着1枚でもな、寒さを感じないのよ。

(13)［14：42］

ほんで、そなしよ、あの、近所の人たちが、「わー、大きな地震や、次に揺れ戻しがあるから、恐いから、安全なとこに行こ」、言うて。出たら細い道やから、その、そこにおったらな、また、もし揺れ戻しで家が倒れてきたら、家の下敷きになるということで広い道に出た。広い道、出たら、こ、高ーい建物ある。10階建てほどの建物ある。で、これがこっち倒れてきたら、やっぱし、あの、下敷きになってしまうやんか。どこに逃げていいんや。そんな状況。そうしたら、また、揺れ戻しが、大きな揺れ戻しがドーンきたわけ。ほな、あのー、隣、そないして、2、3人おった人たちがな、「うわー、恐ーい」と。ほな、ジジイもな、その辺の人と一緒に抱きついて、「恐いー」言うて抱きついて。それを、あの、揺れがおさまるの待っとったん。

(14)［15：37］

そうすれば、今度は、あの、道の、あの、その、道の中、下に、あの水道管やらガス管が敷設されてるやんか。それが破裂してたの。せ、あの、ガス管が破裂してたのかな。ガスの臭いがプンプンするわけ。ジジイはタバコ好きでなぁー、これがあ［大きな声で］。タバコ吸いたい。ガスの臭いしてる。タバコ吸えない。でも、地震はあってもな、何が何やさっぱりわからん状態。でも、気持ちだけタバコだけは吸いたい。でも、ガスの臭いしてるから、ここでタバコ吸って、もし引火して、大きな炎がでたら、また、三ノ宮のあの辺が大きな火事になる。だから、皆なで、タバ…、あの、ガスの臭いするから、絶対に、皆な、ここではタバコ吸うな言うて、皆な、お互いに注意しながら辛抱してた。明るくなってから自分の部屋帰って、なんとか、ここらを、これ［頭上の帽子を指示］を避難所でもらったものやけども、あのー、今まで、あの、それまで着てたものをあわてて被って、今度は、近く、こう、ずーっと、町内会を歩きまわってたら、家が、2階建ての家が、ペッシャンコになってしまった。

(15)［16：55］

それで、その上に、お父さんとお母さんが2人、屋根の上におって、「皆来てくれー。この下に、うちの息子とおばあちゃん、生き埋めなんやー。なんとか助けてくれ」、言うて。だから、必死になって呼んでるわけ。で、神戸の大きな都会だったらな、皆な、大工道具、家を壊すような道具いうのが1つもないわけよ。ほとんど、い、もう家では持ってないわけ。自分たちの家で、のこぎりやかなづちのある家、あるかな？。［「ある！」（複数の児童の返事）］あるー？　わー、すごいなー。まあ、準備万端やなぁ。

(16)［17：35］

でも、あの、この神戸の街ではな、かなづちにしてものみにしても、あの、のこぎりしてもな、あまりなかったんや。だから、あの、今度そういうところ、あ、皆ながよって、どないしたかっていうと、手で1つ1つ上の瓦を、手で、手袋も、何にもないやんか。な、手で1つ1つのけながら、それで、あの「どこや、どこや」言うて、「どこにおるんやー」言うて、上からめくりながら、声をかけて、それで、あのー、声を、あのー、下から声、生き埋めになってる、お兄ち

ゃんには、声、出せる人は、ここやー、ここやー、言うてるところへ、こう、あの、手でめくりながら進んでいった。だから、時間がもーのすごいかかったの。1人たず、助け出すために。普通やったら、そういう、あの、かな…、かなづちやらのこぎりやら、いろんな、あの、そういう大工道具があれば、時間を早く、な、助け出されたんやけども、道具がない。その、あの、そういう、あの、家のはし…、木の端くれができたら、それを道具にして、何とか早く助け出そう。だから、一人出られるぐらいの穴があけばな、そっから、元気なお兄ちゃんは、何とか自分で這い出してくれたんや。

(17) [18：59]

そいで、その隣の部屋におばあちゃんが寝てんねんと。さ、このおばあちゃんのいう、いうことで、そっから穴を大きくしておばあちゃんの所まで、その、明るくなって、あの、行ったら、ちょうど、タンスがボテーッと、おばあちゃんの上に覆い被さってしまってたわけ。だから、おばあちゃんを助け出した折には、もう遅かったの。でも、おばあちゃんにしてもな、そないして、皆な夢があったの。もっと生きて、もっと楽しいことしたい。おばあちゃんにはおばあちゃんなりの、ものすごいすばらしい夢がある。で、そのおばちゃんはな、もーのすごい楽しいおばあちゃんやった。だから、そのおばあちゃんの、あの、日常の、あの面白いこともな、あっ、その、亡くなって、あっ、もうこれで見る、見ることができない思ったら、ものすご悲しかったよ。だから、あの、ほんとに亡くなっていった人たちは、皆な夢があったの。その夢を、この地震で壊されてしまったの。

(18) [20：05]

でも、ほんとに、あー、われわれは命を、1人で絶対に守れない。一番弱い命なんだ。なあ、わかってもらえる。自分で自分の命、守れる？［数名の児童の頷き］だから、自分は弱いから、皆なで助け合って守っていくしかないんだ。だから、今後、あの、いじめっ子やなんかいうて、あるやんか。そんなことはな、絶対にやめてほしい。皆なで助け合って、皆なで楽しく元気に、あの、頑張っていってほしい。だから、あの、今日、こんなぐらいで、あの、簡単に、あ、お話し、避難所の話、せなかったな。ごめんな。［児童の笑声］あはははは。いや、わ、話しすれば、これ、あの、ものすごい膨大な時間になってしまうんで。

(19) [20：55]

で、あのー、あ、も、もうちょっと簡単に言わしてもらうわ。あの、避難所時代、避難してる時に、トイレが一番大変やった。ほな、水洗、水道も止まってる。水洗トイレ、お水も流されない。ウンチしたらウンチ流す、水洗トイレで流されへん、から、そこに山積みになってしまうわけ。ほな、そないなったら、次からウンチできひんやんか、トイレ、行かれへんやんか、誰も。だから、それを、な、するために、ウンチだけは新聞紙にとってゴミに捨てた。ほいで、その、トイレにウンチがたまってるウンチいうんは、皆な、ボランティアの人たちが、手袋もゴム手袋もはかないで手ですくいあげて、きれーいに掃除してくれたの。この、その当時のボランティア

のお兄ちゃん、お姉ちゃんたちいうたら、もーのすごいすばらしい人。自分たち、それができるかな、ボランティアの時に。誰もできないことなの。だから、あの当時のボランティアのお兄ちゃん、お姉ちゃんたちは、ほんとにすばらしいボランティアのお兄ちゃん、お姉ちゃんたち。だから、その、お兄ちゃん、お姉ちゃんたちの、な、手助けがあって、われわれ被災者は、今、元気であるわけやから。だから、その、それからキチーっと、きれーいにそのトイレを、もう、ウンチを新聞紙にとるから、もう1つも汚れない、状態で、ずーっと使わさしていただいたの。

(20)［22：35］

それと、あの、まあ、その避難所になった、後藤先生の、その、学校いうのんは、あの、女子大なの。女学校。女子大学、の学校だったの。お姉ちゃんたちの学校だった。だから、早く、もうほんとは出たかったんやけども、もう、長く長く居座ってしまって、お姉ちゃんたちにも、ほんとうに迷惑かけてしまったなぁ、という気もするんで。で、ほんと言えば、こういうものは、早く、この、家をさい…、あの、整理できて帰れる、それで、次の居場所が見つかればいいんやけども、街、全、全部が壊れてるような所では、自分の住みかを見つけることが、大変難しかった。だから、長く長く居座ってしまうような感じなってしまう。だから、皆なに迷惑かけてるんだけれども、われわれ被災者としては、やっぱし、命、自分たちの命を大切にしたい、こういう励ましの寄せ書きなどをもらってるん、わからんといかんよ。だから、ここで、大変迷惑するけども、この、何とかおらして、頑張らしてという感じで、おらしてもうて。あのー、その、地震の年の、8月20日に避難所が、神戸、あの、被災地の避難所は、みんな解消されていった。そっから、皆な、あの、自分のわが家に帰ったり、また、仮設住宅に移っていったりしていったと。

(21)［24：08］

簡単になってしまったけどな。でも、このー、こ、簡単に、してしまった、あとは、市原のおばちゃんから、じっくりお話し聞いてな。いやー、おおきに。

V　市原さんの語り

(1)［0：00］

眠くなりましたか？ちょっとしんどいかなぁ？もうちょっとだけ頑張ってね。ねぇ、もう、あの、皆さんは、ほんとまだ赤ちゃんだったり、7年前っていうのは、ほんと、ろく…ねぇ、赤ちゃんだったと思うんですけれども、7年前の今日、1月17日、あんな大きな地震があるなんて神戸に住んでる私たち誰1人考えてもいませんでした。神戸の街、行ったことありますか？［ある（複数の児童）］行ったことある人？［はーい（複数の児童）］は、たくさん、神戸の街、来てくれてるんですねー。神戸の街は、すごい綺麗でしょー。今ねー。あんな地震があったなんて誰も…、はい、ありがとう、ありがとう［手を挙げ続ける児童に対して］。あの、あんな地震がね、あったなんて誰も思いませんよね。午前中、みんな、ビデオなんか、観ていただいたんでしょう。あんなことが7年前にあったんです。

(2) [0：57]

私も、神戸が大好きで、神戸って、すぐ北っかわに山があります。で、南は海。で、街はすっごくおしゃれなんです。それで、もう、ずーと神戸に住んでるんですけれども。一度だけ、私も旦那さんの転勤で高槻に2年間住んだことがあります。高槻もずいぶん変わったんですけれども。まあ、そういう風な関係で、高槻ってすごくなつかしいなぁーって思って。でも、やっぱり、皆さん、高槻好きでしょう？［複数の児童が頷く］ねぇ、ずーっと、高槻好きですよね。私も、神戸、大っ好きなんです。

(3) [1：33]

で、7年前の、あの朝、さっきの話にもありましたけれども、ドーンという、すっごい音とともに私もお布団の中からボーンと後に放り出されていました。何が起こったか、まったくわからないまま、ほんとに、あの、フライパンの中で、ウィンナーソーセージ、こうやってやりますよね［フライパンを扱う動作］、お母さんがお弁当なんかに入れるときに。あの状態で、バーッと振りまわされていました。で、ゴオーッていう音とバリバリバリバリ、メキメキメキメキとか、何ともすごい音があの響いてて、で、ワーって叫んでました。もう死ねと思いました。ほんっとにもう死ぬんだ。何が起こったかわからないんだけれども、とにかくもう死んでしまうんだ。そう思いました。長いー、長い時間だったように思うんですけれども、1分たらずでした。

(4) [2：28]

やがて、揺れがおさまりました。真っ暗です。天井から何か、バラバラバラバラ落ちてきますし、壁の匂い、土の匂い、何ともわからない匂いがブーンとしてきました。とりあえず、私も2階へ寝ておりましたので、外に出よう。這いながら、階段の方に行きました。そこにあるはずの階段がなくって、真っ暗の中ですけれども、何かすごい盛り上がっている状態で、階段のところに山のようなものができてるんです。それで、初めて何か、とんでもないことが起きたんだと思いました。で、窓の方に今度行ってみますと、真っ暗で這いながら、やっぱり窓の方に行ったんですけれども。窓は昨日、ちゃんと雨戸も閉めて、カーテンも閉めて寝てたはずなんですけれども、雨戸も窓もありませんでした。外から、「早く出なさい、危ないですからー」って声が聞こえてきたので、とにかく、あの、窓をこう見たんですけど、まあ暗いんでよくわからないですが、誰かが板を立て掛けてくれたんです。こういうふうな板ですけれどね［教室内の板を指示］。で、それを使って下に降りると、もう2、3歩で地面に着いたんです。何と2階が1階になってたんですね。でも、空、外は、まだ、まだ外は真っ暗でした。

(5) [3：49]

で、まわりを見まわすと、西の方にも、北の方にも、東の方にも、もう、すっごい勢いで家が燃えてるんです。すっごい勢いです。もう、パチパチパチパチという音さえ聞こえてくるんです。で、あたりは、ガスの臭いが充満してました。もう、真っ暗の中で見る火事ほど恐ろしいものはなくって、もう、ここも、そのうち燃えてくるんだろう。覚悟しなければいけないような状態で

した。でも、何とか、火事は家まで来なかったんですけれども。やがて、空が少しずつ明るくなって、あたりの様子がはっきりと見えてくるようになりました。そうすると、そこには、昨日まで見慣れた、あたりの景色とはまったく違っていたんです。崩れて屋根が、もう、バターっと地面までついてる家、あるいは、道路にまではみ出して崩れ落ちた家、斜めになって今にも崩れそうな家。電柱と見ると、全部、ずーっと、通りがひら…、あのー、かなり遠くまで見渡せる通りなんですけれども、電柱が全部、北向いて、斜めに倒れてるんです。

(6) [5：07]

ふっと、自分の家を見たんです。そうすると、家の前の電柱がこのへんのくらい…から折れ曲がって、折れて、屋根の上に乗っかってるんです。電柱にやられたんです。もう、屋根がボコッて、こうやって。で、そのために、ベタッと、こう2階が1階になってしまったんですけれども。あとで、わかったんですけれども、2階を支えていたのは1台のこのピアノ［ピアノを指示］だったんですよ。で、ピアノがないところの部屋は、下、2階は、もうズーンとずれて、下のお部屋が、もう上から丸見えの状態でありませんでした。

(7) [5：44]

で、あのー、私も、ね、寝間着のまま外に出てたのん、やっと気がついて、パジャマのままだったんです。で、もう、寒くと、何とも感じないんですけれども、とりあえず、家の中に戻って、着るものを探そうと思って、斜めになった家に入っていきました。もう、家の中は、いろんな物が崩れ落ちて、まるで、ゴミ捨て場のような状態でした。大きな水槽があったんですね。熱帯魚を飼ってました。その水槽も倒れてビシャビシャでした。で、そういうふうな中で、こう、一生懸命、服を取り出して、上に上に重ねて、で、もうズボンも、もういっぱい穿いて、でー、履き物が、もう、まず、玄関がなくなってしまいましたから、靴下をいっぱい履いて。で、もうー、とにかく早く出よう、斜めになった家の中にいると、気持ちが悪くなるんです。初めて知りました。乗り物に酔ったような、あんな感じで、気持ちが悪ーくなって、外に出て、また外に出て行きました。

(8) [6：45]

そうすると、さっきの長谷川さんの話にもあったように、近所でたくさんの人がまだ外に出てない、生き…まだ埋められた、建物の下敷きになって出られてないっていうことがわかりました。皆で、そこの家に行くんですけれども、声の聞こえてる方を探しながら、あの、さっきのお話しって同じなんですけれども、瓦を1枚1枚はがして、板をどけて、そして、声の方に、こう行って助け出すんですけれども、そのうち、空にヘリコプター、今日も、朝からヘリコプターがたくさん飛んでましたけれども、取材のヘリコプターが、もうかなりの数、旋回するんですね。そうすると、もう、こうやって喋っている声すらも聞こえなくなるんです。すると、さっきまで聞こえてた建物の下になっている人の声が、まったく聞こえなくなってしまうんです。時間ばっかりが、ドンドンドンドン経って、早く助けなくってはならないんですけれども、もう、闇雲にどっ

こでもいいから、とにかく掘り出してっていう状態で、そうやって、せっかく助け出した人たちがたくさん亡くなられていました。

(9) [7：51]

うちの裏に住んでた赤ちゃんは、5ヶ月だったんです。でも、で、ね、えー、その、ベットの近くに置いてあったテレビが飛んできて、赤ちゃんの上に乗っかってしまいました。その赤ちゃんは、まだ小っちゃいですよ、5ヶ月ですからね。[小さな声で] 亡くなってしまったんです。その赤ちゃんも、お父さんがお布団にくるんで、ずーっと、1日中、家のまわりを、ほんとに抱っこして寝かしてるように、クルクルクルクル、クルクルクルクル何度も何度も歩いていたのが、今でも目に浮かびます。

(10) [8：29]

また、近くのマンションは、マンションなんて、すごい頑丈ですから大丈夫だと思いますよね。だけれども、1階がペチャンコになってしまって、1階に住んでた18人の人たち…が、そのまま出られない状態になっていました。でも、マンションは人間の力ではどうすることもできないんです。それで、その人たちが、やっと助け出されたのは、地震から2日経ち、3日もたって、自衛隊の人たちが来て、やっと、助け出されたんですけれども。[小さな声で] そこのマンションの人たちは、全員亡くなっていました。…そして、その当時、毎日のように新聞に、たくさんの人の名前が、亡くなった人の名前が出てくるんです。

(11) [9：23]

で、私は、家が全部つぶれてしまって、その日の夜に、神戸の、須磨の、少し向こうですけれども、垂水という所におばあちゃんがいますので、そこに車で、普段だったら40分ぐらいで着くんですけれども、7時間かかって、もう、信号もみんな止まってるんです。照明も何んもないんです。で、あっちこっちで火事がいって、水が出ませんから、燃える放題。だから、そういう火事のところを避けながら、ずーっと行って、7時間かかって、垂水っていう所に着いたんです。でも、そこが神戸なのに、全然、地震の被害がないところでした。着くと、真夜中の2時か3時でしたけれども、シーンと静まり返って、街灯もついていました。おばあちゃんの所に着くと、テレビもついてるんです。電気が明々とついてる。お水も出ました。でも、ガスは出ませんでした、けどね。もう、嘘のような、どうして、って、はじめて、ワンワンワンワン泣けて、悲しかったのかどうかよくわからないんですけども。もう、涙が止まらなくなった、そんな状態でした。

(12) [10：38]

で、それから、しばらく、おばあちゃんの家にいたんですけれども、毎日のように新聞に名前がダーッと載っていくんですよ、亡くなった人たちの。その中に、もう、ほんとに知ってる人の名前が、ドンドンドンドン、ドンドンドンドン、えーッ、あの人もこの人も、っていうぐらいに、

名前が載っていくんです。その中で、ある男の子の名前を見つけたんです。その男の子は、私の所に、ちょっと、お稽古に来てた子なんです。まさ…、ちょっと名前が珍しかったんで、エッと思って見ると、その近くのところにお父さんの名前、お母さんの名前、そして、その男の子の名前、そして妹の名前、4人の名前が全員載っていたんです。まさかって思ったんです。マンションに住んでましたからね。で、次の日、東灘の方に戻って来ました。で、その男の子の家に行ってみたんです。そうすると、マンションは普通に建ってるんです。あれッ？、やっぱり大丈夫だったんだ、って思ってよく見ると、やっぱりそこも1階がペチャンコになってたんです。そして、マンションの横の空き地の所に、見慣れた彼の自転車が倒れてました…。

(13)［11：56］

その男の子は中学1年生だったんです。でも、男の子は小学校の時から少年野球を、その、少年野球のチームに入って頑張っていました。いつか、高校野球で甲子園に出て、阪神タイガースの、選手になることを夢見ていたんです。すごく泣き虫の男の子だったんですけれども、野球の話を、私も野球が大好きで、で、野球の話をすると、ほんっとにもうお稽古そっちのけで話をしていたんです。その子の夢が、たったあれだけの短い時間の地震のために一瞬にして奪われてしまいました。彼は、その男の子は自分が死んだことすら、今わかってないかもしれません。その子のお友達は、今、大学生です。皆な、楽しく大学生活を送っています…。ね、楽しい毎日を送ってるんです。でも、その男の子は、その日で、もう、いなくなってしまった。きっときっと、楽しい人生がおくれたかもしれません。今、いろんなところで、あの、人の命も自分の命も大切にしない人たちのことがよく新聞に出ていますね。大人もそうですけれども、子供たちもそうです。でも、阪神・淡路大震災でたくさんの人たちが死にたくないのに、死ななければならなかったということを皆さんにも知っていただきたい。

(14)［13：30］

そして、私の家の近くにレインボーハウス、聞いたことありますか？レインボーハウス。これは、地震で自分は助かりました。でも、お父さんやお母さんを亡くした子供たち、その子供たちを、なんとか1日でも早く元気になってもらいたいということで、できたところです。そこには、大学生のお兄さんや、お姉さん、あるいは、お父さんやお母さんの代わりをしてくださる方たちが、24時間体制でいらっしゃいます。そこに行って、お兄さんたちと遊んだり、勉強したり、お話をしたり、ご飯を食べたり、するところなんですけれども。ほんとに7年経った今も、その子たちは、ほんとに少しずつ笑顔が戻ってるっていうことなんですけれども。やっぱり、まだまだ寂しい思いをしているんです。

(15)［14：30］

このように、地震っていうものは、ある日突然やってきて、いろんな人の命を奪い、また楽しい夢までも壊していきます。そして、いろんな思い出の品物までも、ぜーんぶ根こそぎ持っていくんです。でも、今こうやって、私も長谷川さんもそうですけど、神戸の皆なはすごく元気にな

っています。神戸の街も元気になりました。どうしてでしょう。たったまだ短い時間なのにねぇ。ほんとに7年しか経ってないのに、皆な、元気になっています。それは、あの日、日本中から、あるいは世界中から、いろんな方たちがボランティアでかけつけてくれました。そして、神戸の皆なに元気を出してって励ましてくれました。勇気をくれました。助けてもいただきました。そういうふうな姿を、皆な見てたんです。

(16) [15：34]

でも、地震の時って、皆な、心がすごく病気になっていました。食べ物を、食べ物がなかったから、ほんとに食べ物のことでイザコザが起こったり、あっちこっちで物が取り合いになったりしていたこともあります。あの、私の所では、避難所…が、あの、小学校が避難所になってるんですけれども、そこにはたくさんの人たちが、あの、避難していってましたけれども、そこで、食べ物を、あの、めぐって、いろんな問題が起こっていました、しょっちゅう。最初は、皆な、分け合って皆なで仲良くしていたんですけれども、何日か経っていくうちに、だんだんだんだん、心が病気になっていくんですね。自分が自分が、っていう気持ちが起こってくるんです。大人たちが結構もめごとをしていました。

(17) [16：25]

で、そんな中で、あなたたちと同じぐらいの子供たちがどうしたんでしょう。ある時、子供たちは自分たちから率先して、食べ物を皆なに、こう配るようになりました。それも、お年寄りの人から、あるいは、小っちゃい子供から。ほんとに小学生が中心になって、そのことを始めたんです。そうすると、まわりの人、大人たち、恥ずかしいですよねぇ。だんだんだんだん、そういうふうな、イザコザとか、もめごとがなくなっていきました。ある時、お風呂が全然入れなかったんで、自衛隊の人たちが大っきなお風呂を持ってきてくれたんです。運動場に、すごい大っきなお風呂ができました。皆な、もう何日もお風呂に入ってないんです。皆な、先に入りたいんです。でも、誰も自分から入ろうとしなかった。赤ちゃんから、お年寄りから。このように神戸の皆なが頑張って…。ねぇ、すごい心を取り戻しました。

(18) [17：30]

それは、やっぱり、先程も紹介していただいた全国から送られてきた、こういうふうなお手紙であったり［教室の寄せ書きを指示］、ボランティアの人たちの励ましであったりするわけなんです。今、私たちが、今、私たちは、今生きてますよね。この、わた…、生きてる私たちができること、何かあるんですよ。いろ…、世界中でいろんなことが起きてます。そういう風な人たちのために私たちができること、必ずあります。それは出かけていって手伝うことではなくって、優しい心、それを形にあらわしてお手伝いすることできますよね。そういうふうなことのできる、そういうふうな気持ちを持った人たちになっていただきたいと思って、私は語り部をしてるんです。そして、今、生きてる私たちは、命をとっても大事にしていっていただきたい。あの地震の日に、死にたくないのに、死ななくてはならなかった人たちがたくさんいて、夢も希望も全部な

くなってしまった人たちのこと、思い出していただきたいんです。

(19)［18：44］

そして、私は神戸が好きでまた神戸に戻ってきました。そして、今、同んなじところに住んでいるんですけれども。たくさん、神戸は家が増えました。マンションも増えました。人口も増えたんです。だけれども、前から神戸に住んでいた人っていうのは、半分になってしまいました。新しい方が半分入ってこられています。じゃ、その半、半分、残りの半分の人たちはどうなのか。もう神戸が、もう嫌になった方もいるかもしれません。でも、私はそうは思わないんです。皆な、帰りたくっても、まだまだいろんな事情があって帰れない人たちなんです。ほんとに帰りたいのに帰れない、その人たちが日本中のいろんなところに、まだ、頑張っています。その人たちが1日も早く帰れるように私たちは、一生懸命頑張っています。

(20)［19：37］

どうぞ、皆さんも、自分たちのできることで何か人のために役立つことがあるっていうことをいつも心に留めて、そういうふうな優しい心を持った大人になっていただきたい。そして、あなたたちの先輩の方たちが、こうやって、心のこもったお手紙とかで神戸の子供たちを励ましてくれたことを誇りに思って下さい。短いですけれども、私の話とさせていただきます。また何か、あの、地震の話はいっぱいあるんです。あの、ほんとに何時間話しても尽きないんですけれどもまた機会がありましたら、私の話も聞いて下さい。ありがとうございました。

文　献

矢守克也　2001　災害体験の記憶と伝達　やまだようこ・サトウタツヤ・南博文（編）「カタログ現場心理学――表現の冒険――」金子書房　p.112-119.

矢守克也　2003　4人の震災被災者が語る現在――語り部活動の現場から――　質的心理学研究, 2（印刷中）

Yamori, K. in press The way people recall and narrate their traumatic experiences of a disaster: An action research on a voluntary group of story tellers. (In) Kashima, Y., Endo, Y., Kashima, E., Leung, C. and McClure, J. (Eds.), *Progress in Asian Social Psychology*, Vol.4. Seoul:Kyoyook-kwahak-sa.

註

本研究は、平成12－13年度科学研究費補助金（奨励研究A（課題番号：12710084））、および、平成12－14年度科学研究費補助金（基盤研究C（課題番号：12610152））の助成を得て実施されたものである。

Summary

This paper offers a transcript of oral narratives which were given to school children by four disaster victims of the 1995 Kobe Quake. The story tellers, Ms. Shono, Ms. Asai, Ms. Ichihara, and Mr. Hasegawa, are members of a voluntary group, called Group-117, whose aim is to pass their experiences to the next generation. The author has conducted an action research in Group 117 to build up an action program for narrating as well as to gather narrative accounts for social psychological investigation of collective memories or collective forgetting. The transcript in this paper is presented to provide empirical data for the social psychological analyses, reported in Yamori (2003), on how traumatic experiences of disaster victims were told to others. The author would like a reader to refer to the analyses and discussions in Yamori (2003) along with the transcript in the paper.